求心顔および遠心顔が男性の顔印象に及ぼす影響

○高木 幸子¹・安田 孝²(常磐大学¹・松山東雲女子大学²)

キーワード：求心顔，遠心顔，男性顔

The effects of centripetal and centrifugal male faces on impressions

Sachiko Takagi¹ and Takashi Yasuda²(Tokiwa University¹, Matsuyama Shinonome College²)

Key Words : centripetal faces, centrifugal faces, male faces

目的

顔の魅力の指標には様々あるが，近年，“求心顔”と“遠心顔”という分類が挙げられている。求心顔は「顔のパーツが中央に寄っている顔」，遠心顔は「顔のパーツが中央から離れている顔」を意味する（岡田・渡邊，2017）。一般的に，女性顔では，求心顔は知的で大人っぽい印象を与え，遠心顔は穏やかで落ち着いた印象を与えるとされ，女性向けファッション誌や美容雑誌ではこうした特徴を持つ顔に見せるためのメイク特集が組まれている。岡田・渡邊（2017）の研究では，女性の平均顔を用いてパーツの配置を画像編集ソフトによって人工的に操作した顔画像刺激を作成し，SD法による印象評価実験を行った。結果として，元の顔（平均顔）と比較して求心顔や遠心顔では活発さや親しみやすさの印象は変化することが確認されたものの，求心顔が活発で遠心顔は不活発とするような傾向はみられなかった。岡田・渡邊（2017）はこの結果が刺激作成の際の元画像や加工の過程に起因していると考えられている。

そこで本研究では，男性顔でも予測されているような印象変化が生じるのかに関して，実際にメイクを施して作り出した求心顔と遠心顔を用いて検討することを試みた。

方法

実験参加者 実験には35名（男性19名，女性16名）が参加した。平均年齢は20.97歳（ $SD = 0.88$ ）であった。

実験刺激 21歳および22歳の男性モデル11名に3種類のメイク（1. ベースメイクのみ，2. 求心顔メイク，3. 遠心顔メイク）を施して撮影した静止画像計33枚を刺激とした。撮影ではモデル全員に額を出してもらい，顔部分をくり抜いて全顔刺激を作成した。

手続き 実験は集団形式で行った（最大8名；最小1名）。実験では計33枚の顔刺激を教室前方のスクリーンに実験ごとにランダムに呈示したうえで，親しみやすさ・活発さ・大人っぽさ・知的さの4項目について6段階で評価することを実験参加者に求めた。各刺激の呈示時間は2.7秒であり，4項目の評価の時間は10秒とした。

結果

分析では，4項目すべてにおいて求心顔および遠心顔における評価値からベースメイクのみにおける評価値の差分を算出して従属変数とし，メイクの種類（求心顔／遠心顔）を独立変数としたt検定を実施した。差分をとった理由は，各モデルの元来の顔つきによる評価の差を相殺するためであった。t検定の結果，大人っぽさと知的さの項目に関してはメイクの種類の間で有意差はみられなかったものの（大人っぽさ： $t(34) = -0.81, n.s.$ ；知的さ： $t(34) = -0.42, n.s.$ ），親しみやすさと活発さの項目に関しては有意差がみられた（親しみやすさ： $t(34) = 2.59, p < .05$ ；活発さ： $t(34) = -1.83, p < .05$ ）。親しみやすさ項目の結果をFigure 1に，活発さ項目の結果をFigure 2に示す。これらの結果から，求心

顔メイクと比較して遠心顔メイクの方が親しみやすいと評価され，一方で遠心顔メイクと比較して求心顔メイクの方が活発だと評価されることが明らかとなった。

考察

上述の結果から，第一に，求心顔および遠心顔を作り出すメイクによる印象操作は男性顔においても有効であることが示唆された。第二に，求心顔メイクと比較して遠心顔メイクの方が親しみやすく，あまり活発ではないとの印象を与えることが明らかとなった。このことは，遠心顔は穏やかで落ち着いた印象につながるのと予測に一致すると考えられる。しかしながら，本研究の結果では大人っぽさと知的さの項目では差がみられなかったため，求心顔は知的で大人っぽい印象につながるのと予測は支持されなかったといえる。今後は，知的さと大人っぽさの印象につながる顔特徴についてさらに検討するとともに，実際のメイクと人工的なパーツの操作では与える印象にどのような差があるのかについて検討する必要がある。

引用文献

岡田莉奈・渡邊伸行（2017）．求心顔および遠心顔の印象の検討．心理学の諸領域，vol.6，33-40．

謝辞 本研究は，常磐大学人間科学部コミュニケーション学科2018年度卒業生 笹嶋晴佳さんの協力を得ました。

Figure 1. 親しみやすさの評価におけるメイクの種類ごとの平均値(エラーバーはSE)

Figure 2. 活発さの評価におけるメイクの種類ごとの平均値(エラーバーはSE)